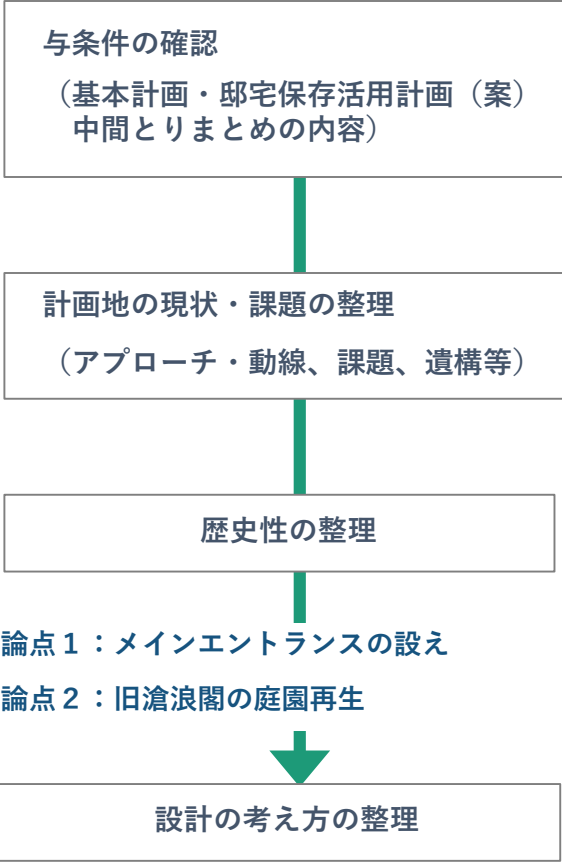


明治記念大磯邸園（旧滄浪閣エリア）の設計について

以下の流れにより、旧滄浪閣エリアの設計を検討した。



今回の委員会でご議論いただきたいエリア

明治記念大磯邸園基本計画、明治記念大磯邸園邸宅保存活用計画（案）中間とりまとめにおける設計に際しての与条件は、以下の通り。

■ 明治記念大磯邸園基本計画(H31)

風致保全計画

- 湘南の邸園文化を象徴する歴史的遺産として、本邸園の風致の保全を図るため、重視する構成要素と景観軸を設定し、以下の取組を行う。
- ・本邸園内の近景である邸宅や庭園の修復、中景である松林を保全。旧滄浪閣の区域等の歴史的景観が失われた空間については、庭園や松林を再生する。
 - ・本邸園のエントランス等の東海道（国道1号）に面する空間においては、松並木等の歴史的景観との調和を図る。



(4-2風致保全計画 より抜粋)

エントランス

旧滄浪閣の区域にメインエントランスを配置し、来園者の滞留等が可能な空間、本邸園のガイダンス空間を設けます。東海道（国道1号）の松並木等の歴史的景観との調和を図りながら、邸園文化を象徴する場のエントランス空間にふさわしい修景を行います（以下、略）。

旧滄浪閣(伊藤博文邸跡・旧李王家別邸)の庭園

…（略）古写真等の既往資料をもとに庭園や松林を再生し、邸宅から庭園、松林、海へと散策できる場とします。

庭園の再生にあたっては、タギョウショウ等の既存の植物を保全するとともに、梅子夫人が愛でていた花庭に近づくよう伊藤邸時代にゆかりのある草花を用いた花修景を行います。また、伊藤邸の時代に建てられていた四賢堂跡の標示等を行います。

(4-3.施設計画 より抜粋)

■ 明治記念大磯邸園邸宅保存活用計画(案)中間とりまとめ(R1)

エントランス施設(新築)の配置・規模

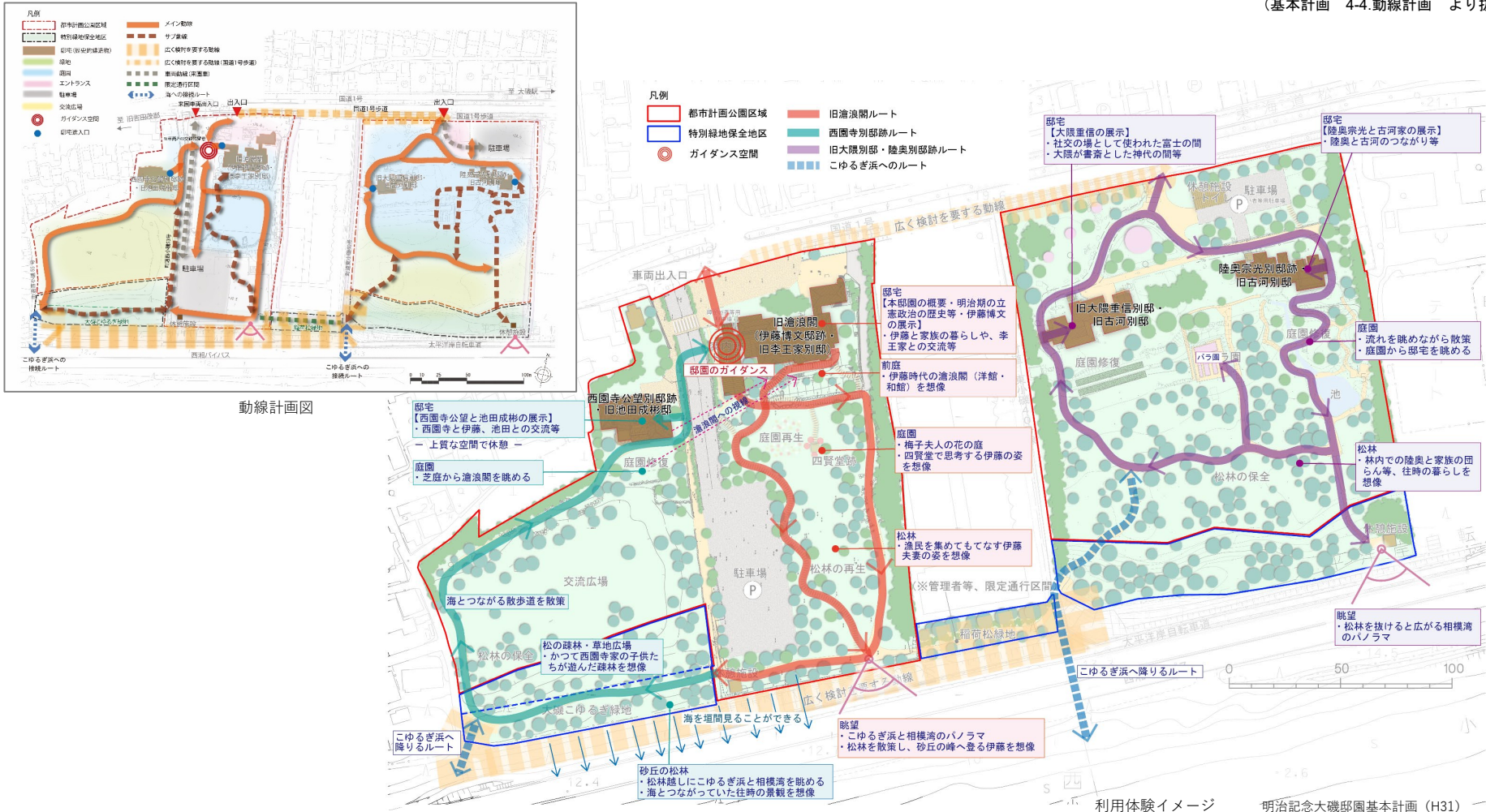
エントランス施設は、旧滄浪閣の北から西側の空間に設け、…（略）類似施設を参考に、エントランス施設に導入する機能・施設とその規模を検討した結果、規模は概ね850～900㎡程度と想定する。

(第6章第4節エントランス施設の整備より抜粋)

動線計画

- ・ 園内の動線は歩行者利用を中心とし、出入口から邸宅へと続き、庭園の外周部、松林をつなぐ動線をメイン動線とします。メイン動線は、車いす利用者等の多様な来園者に配慮し、バリアフリー対応を検討します。
- ・ 邸宅や庭園から松林、海へとつながるサブ動線を設け、邸園内の回遊性を高めます。
- ・ 旧滄浪閣及び西園寺別邸跡の区域、旧大隈別邸及び陸奥別邸跡の区域をつなぎ、一体的な利用を図るため、国道1号の歩道及び太平洋岸自転車道等の海側それぞれを「広く検討を要する動線」とし、今後、関係機関と調整を行い、邸園内外の接続方法を検討します。
そのうち、稲荷松緑地内については、周辺の土地利用や生活環境に配慮した上で、管理用動線等の「限定通行区間」とすることを検討します。

(基本計画 4.4.動線計画 より抜粋)



【滄浪閣の表門の佇まい】

- ・伊藤博文邸時代の表門は、東海道の松並木沿いに黒塗りの冠木門であり、門には「滄浪閣」の扁額が掲げられていた。
- ・塀は近隣の鍋島別邸と同じ板塀が使われていた。
- ・古地図に伊藤博文邸「家屋図」と現況図を重ね合わせるとともに、古写真等の資料をもとに、滄浪閣表門の概ねの位置を推定した（下図のとおり）。

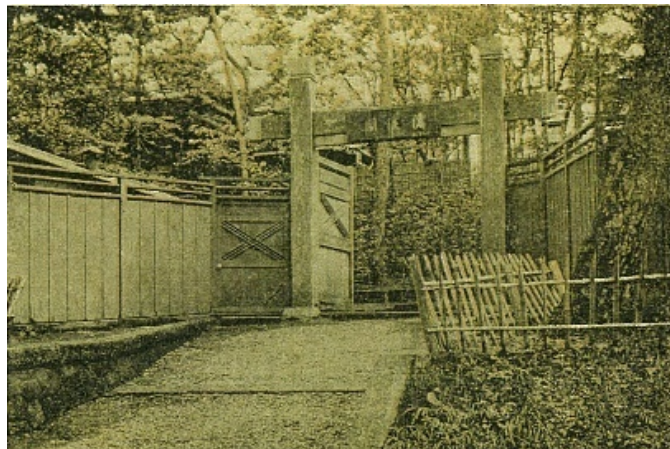
<明治期頃>

滄浪閣前の松並木と街道



絵はがき大磯風景 滄浪閣（其一）（明治末期～大正初期）（大磯町郷土資料館所蔵）

滄浪閣表門



「太陽第十五卷第十五号-臨時増刊伊藤博文公」（1909）博文館

表門の位置 現在の北側の通用階段前に表門があったと考えられる

滄浪閣表門 古写真



滄浪閣大手門 明治後期（大磯町立図書館所蔵）



滄浪閣を訪問した韓国李王家の李綱を出迎える伊藤（大磯町立図書館所蔵）



■ 滞留空間を確保する上での課題

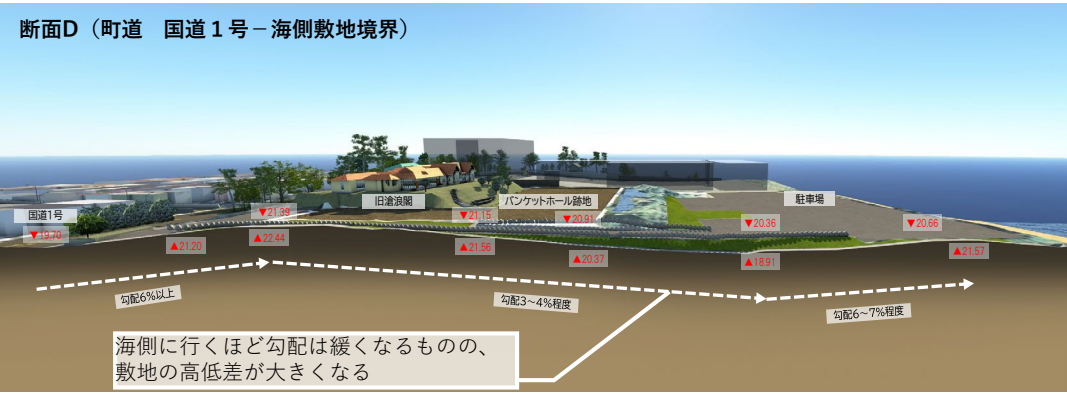
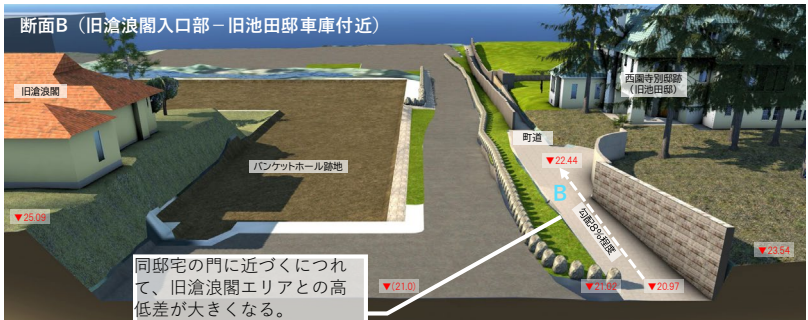
- ・旧滄浪閣と隣接する西園寺別邸跡の敷地は、共に国道1号から高い位置にあり、歩道から各邸宅への縦断方向（南北）の傾斜が8%以上ある。（A2,B）
- ・西園寺別邸跡の敷地は起伏が大きく、国道1号から海側に向かうほど、旧滄浪閣エリアとの横断方向（東西）で高低差が生じている。（C,D）

■ 動線を確保する上での課題

- ・旧滄浪閣前の国道1号歩道の幅員は約1.7m程度であり、歩道通行人と本邸園への来園者が輻輳する可能性があるなど狭い状況。（A1）



旧滄浪閣（伊藤博文邸跡・旧李王家別邸）エリア現状図（令和2年3月時点）



【滄浪閣の庭園の佇まい】

- ・ 四賢堂は、5～60本の梅の木に囲まれ、松を背景に高い土台の上に設置されていた。
- ・ 松林の中に道があり、伊藤博文が散策していた。
- ・ 手前の花壇は、切石（一部レンガ）を並べ、畝状に縦横に配置されていた。



滄浪閣前庭にて（大正初期）（大磯町郷土資料館所蔵）



滄浪閣の園庭（明治末期）（大磯町郷土資料館所蔵）
※撮影時は四賢堂ではなく、伊藤が祀られ五賢堂になっている可能性があるものの、位置は四賢堂と判断）



滄浪閣周辺の松林（大正4年11月撮影）（大磯町立図書館所蔵）

品種名	高さ (cm)	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
ガウラ	30～150																																				
ポピー	15～80																																				
ジキタリス	60～120																																				
シャクヤク	60～120																																				
バラ	1～3m																																				
ツルバラ	1.5～3m																																				

※古写真は花期から初夏（5～6月）に撮影されたと推定

■ 関係史料より、伊藤邸時代のもと思われる構造物が残されている可能性がある。
一方、商業施設や駐車場により、かつての庭園や松林が消失している。



① 伊藤公滄浪閣之旧蹟碑 (S16 (1941))
伊藤博文没後32回忌に伊藤の主治医が発起人となり、西園寺や池田、古河といった町内の名士が賛助し建てられた。
(1941.11.10横浜貿易新聞より)



滄浪閣 (洋館) (年代不明) (大磯町立図書館所蔵)

← 庭と邸宅をつなぐ階段



④ 南側階段と⑤ 空池
階段は左写真の洋館前の階段とほぼ同位置にある。また、風化状況から近代にさかのぼるものと推定 (詳細は不明)

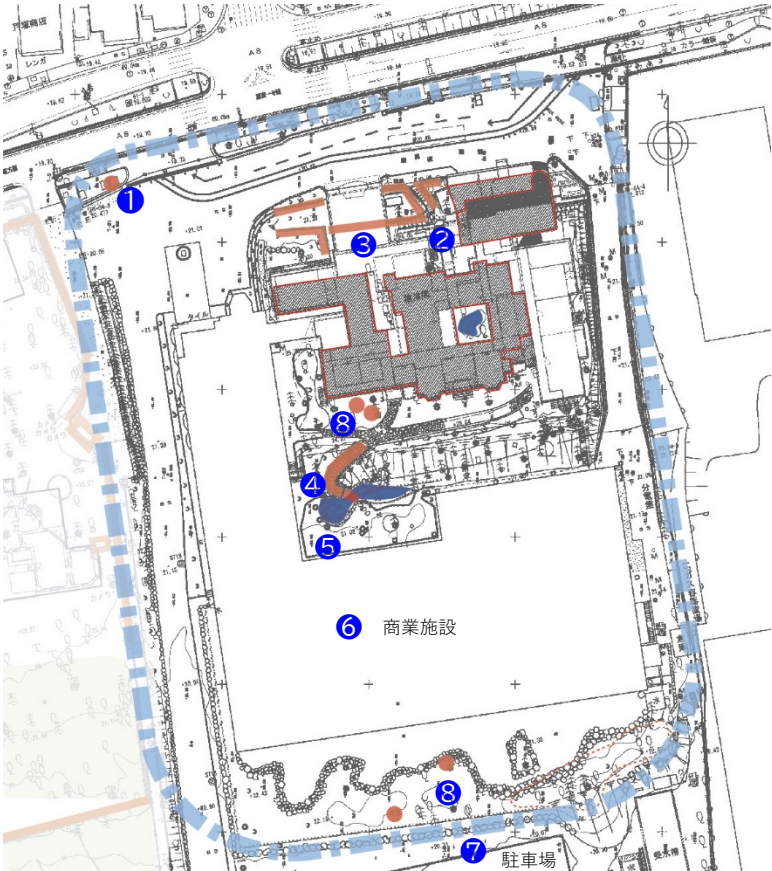


② 通用階段



③ 通用階段横の石積

② 通用階段と③ 石積
伊藤邸に関する文献の記述等から、「滄浪閣の洋館へつながる階段」と石積の一部と推定



⑥ 商業施設



⑦ 商業施設時代の駐車場



⑧ その他修景物



灯籠、水鉢
和室前の灯籠や水盤、パンケットホール前の灯籠類は年代不明



パンケットホール前の灯籠

■関係史料より、伊藤邸、李王家別邸の時代に植えられていたマツやタギョウショウ、タイサンボク等が現存する可能性がある。



滄浪閣（洋館） （年代不明） （大磯町郷土資料館所蔵）



李王家別邸 （年代不明） （大磯町郷土資料館所蔵）



① 邸宅背後に松の大木が数本残る



李王家別邸
昭和26（1951）年 伊藤博文旧居・滄波閣 （朝日新聞社提供）



② 邸宅前に列状にある
タギョウショウ



③ 李王家別邸玄関付近に残る
タイサンボク



■大磯駅からの歩行者をメインに、自動車利用で駐車場からの歩行者、旧吉田茂邸地区（神奈川県立大磯城山公園）からの歩行者等の動線が想定される（緑矢印）。

また、太平洋岸自転車道の延伸が行われており、当該自転車道からの自転車利用者のアクセスについても今後、検討が必要。



※太平洋岸自転車道アクションプラン

千葉県銚子市から和歌山県和歌山市に至る延長1,400kmの自転車道構想として、ナショナルサイクルルート（国土交通省の優れたサイクルルートを国内外にPRする認定制度）指定に向けた取組みが進められている。

■既往計画での位置づけ・対象地の課題・歴史性

- ・ 来園者の滞留等が可能な空間を設ける。
- ・ 東海道（国道1号）の松並木等の歴史的景観との調和を図りながら、邸園文化を象徴する場のエントランス空間にふさわしい修景を行う。
（趣ある佇まいとなる植栽を行う）
- ・ 新築エントランス施設は、旧滄浪閣の北から西側の空間に設け、規模は概ね850～900㎡を想定。
- ・ 国道1号歩道よりも高い位置に新築エントランス施設予定地があることから、多様な来園者の利用に配慮し、高低差の解消が必要。
- ・ 国道1号歩道は来園者の邸園へのアクセス動線とともに近隣住民の生活動線も兼ねることから、快適な通行を実現するため、狭さの解消が必要。



■設計コンセプト(案)

明治記念大磯邸園の玄関口として多様な来園者を迎え入れることに留意しつつ、東海道の松並木等との歴史的景観との調和を図りながら、邸園回遊のプロローグの場であることを印象づける空間とする。

■設計の考え方(案)

機能性

- ・ メインエントランスとして、多様な来園者が最初に訪れる空間であることを踏まえ、ユニバーサルデザインに対応しつつ、来園者の集合離散等の利用形態を想定し**広場空間を確保**する。
- ・ 広場空間のデザインにあたっては、徒歩が園内移動の中心であることから歩行者動線の確保を主にするが、自動車等でのアクセスにも配慮し、限られたスペースの中で**歩車分離等の安全性に配慮**しながら多様なアクセスへの対応を検討する。

歴史性

- ・ 大磯が明治政界の奥座敷と言われ、別荘地として発展したきっかけである滄浪閣（伊藤博文邸）の表門のあった位置を正門とし、**伊藤博文らが辿った滄浪閣への足取りを感じられるような配置をベース**とする。※新築エントランス施設の建築位置とも引き続き調整を行う。

景観性（修景）

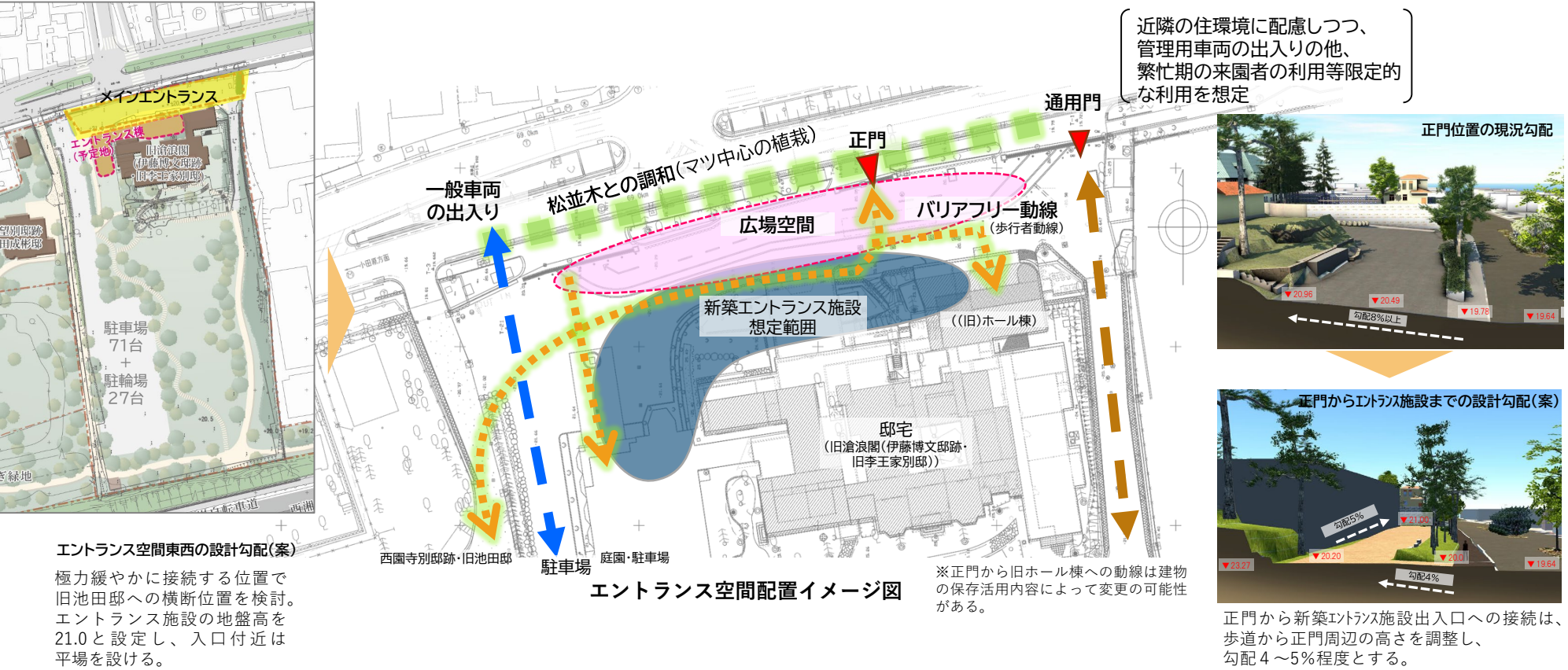
- ・ メインエントランス対象地は、異なる時代の建物が立地するなど本邸園の特徴である**”積層する歴史”**を表していることから、建物（旧滄浪閣、新築エントランス施設）との調和を図りつつ、**邸園の回遊ストーリーの起点に位置することを意識した設え**とする。
- ・ 国道1号沿いに植栽（松を中心に検討）を行うことで**松並木との連続性を確保**し、周辺の景観との調和を図る。
- ・ かつての**別荘地としての風格**を感じさせつつ、閉園時間等の**防犯性に配慮した外周柵等を設置**する。

■滞留空間の確保

- ・ 正門から新築エントランス施設前の空間を、利用者（歩行者）が滞留できるよう広場空間を設ける。
- ・ 国道1号歩道側から新築エントランス施設などの主要な施設に至る園路勾配を緩くするため、地盤を切り下げ、勾配を5パーセント以下とする。
（既存建物（（旧）ホール棟、西園寺別邸跡・旧池田邸）の地盤高は大きく変更できないため、新設エントランス施設想定範囲付近で調整）
- ・ 国道1号歩道の拡幅が難しいことから、正門に加え、旧古河別邸エリア側に通用門を設けることで、繁忙期の歩行者の臨時出入口や管理用車両用の出入りに活用する。

■景観・修景要素

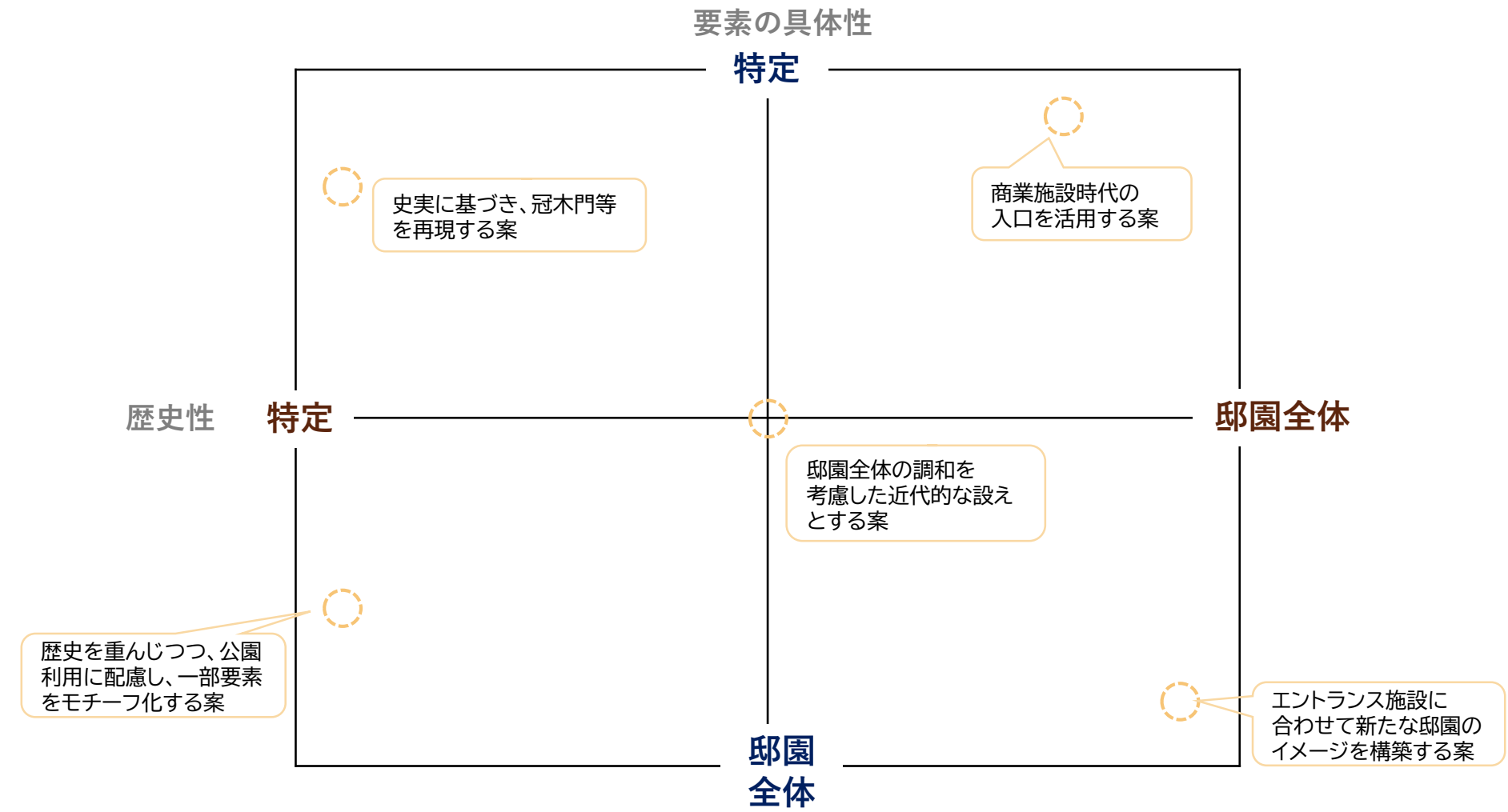
道路植栽を広げ、歩道と公園敷地の間に松を中心とした植栽を行い、既存の松並木との連続性を確保する。



デザインの方向性

設計コンセプトから具体のデザインを検討するにあたっては、歴史性や景観性、機能性など様々な観点からアプローチすることになる。

上記観点をもとに検討を進めると、例えば史実を重視した明治期の表門を再現する案や、旧古河別邸エリアや現存建物の様相に合わせて近代的な設えとする案など幅広い内容が考えられる。



■既往計画での位置づけ・対象地の課題・歴史性

- ・松林を再生し、邸宅から庭園、松林、海へと散策できるようにするとともに、景観軸の連続性を確保する。
- ・梅子夫人の花庭に近づくよう、伊藤邸時代にゆかりのある草花を用いた花修景を行うとともに、伊藤邸の時代に建てられていた四賢堂の標示等を行う。
- ・敷地の特徴である砂丘地形、明治期から続く可能性が高い地割、邸宅周辺の階段等の既存構造物を活かす。
- ・邸宅を特徴づける建物周辺の景観木（タギョウショウやマツ）を中心に、既存樹木を可能な限り保存・活用する。



■設計コンセプト(案)

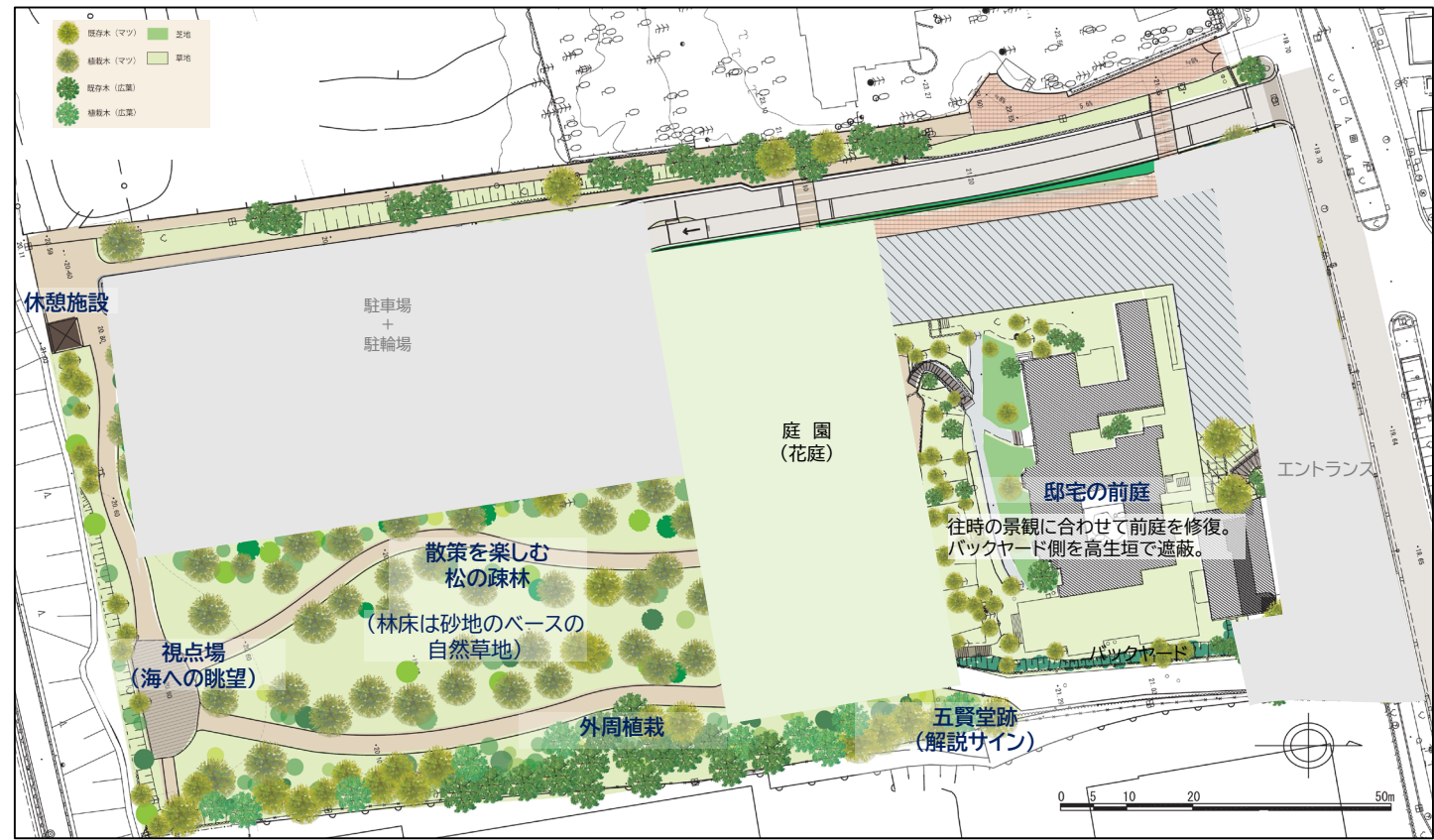
伊藤博文や梅子夫人が過ごした庭園・松林の雰囲気を残しつつ、四季折々の景観を魅せる空間とする。

■設計の考え方(案)

- ・既存植栽や構造物をできるだけ活かしつつ、古写真等を展示しながら往時の庭園の雰囲気を感じられるような空間とする。
 - ※既存の構造物は旧滄浪閣エリアでの活用を検討し、活用が困難な場合には、他のエリアでの活用を検討する。
 - ※往時の雰囲気を感じられるよう、駐車場や隣接地と邸園・松林の境界には遮蔽植栽等を行う。
- ・明治期に渡来、流行した西洋草花を中心に、一年を通して四季折々の邸園の表情を演出する多彩な植栽計画を検討する。
- ・別荘地の庭園として、邸宅から庭園と松林、海への眺望を意識しつつ、庭園から邸宅への景観にも意識し、邸宅と調和した空間を創出する。
- ・邸宅から庭園を抜け、松林へ抜け、海への眺望が観覧できるようユニバーサルデザインに対応した園路を設ける。
- ・設計に際しては、海沿いの環境性や長寿命化など維持管理面にも配慮する。

■花庭以外の園地設計

- ・邸宅周りの前庭部分は、既存木（一部）を残しつつ、古写真をもとに複数人が滞留できる芝庭とする。
- ・庭園の園路・広場は、砂地の風情を踏襲し、土系舗装とする。
- ・西園寺別邸跡エリアや駐車場等の分岐となる位置に休憩施設を設ける。
- ・松林は、かつての伊藤博文らが散策した松林をイメージし、散策を主な利用とする。散策が楽しめるよう庭園から海へ向かって緩やかな形状の園路を設け、海側の一部に僅かに起伏をつけ、海への視点場を設ける。なお、松林の林床は、海岸植生を活かし、砂地ベースの草地とする。
- ・駐車場や隣接地との境界部には、遮蔽植栽を行う。

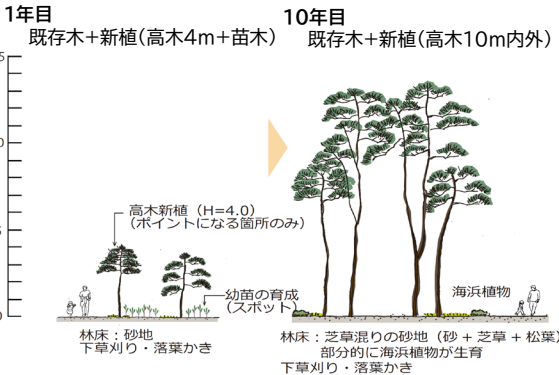


邸宅周りの庭修復イメージ



旧滄浪閣（年代不明）（大磯町郷土資料館所蔵）

松林の再生イメージ



土系舗装イメージ



デザインの方向性

設計コンセプトから具体のデザインを検討するにあたっては、歴史性や景観性、機能性など様々な観点からアプローチすることになる。

上記観点をもとに検討を進めると、例えば史実を重視し、明治期の花庭の設えを再現する案や、花壇や四賢堂等の主な歴史的要素は残しつつも、現存邸宅からの眺望や公園利用の利便性に配慮した案など幅広い内容が考えられる。

